

〈シンポジウムを受けて〉

「全カリ」と「専門」—私の実践報告

加藤 睦

私は現在文学部日本文学科に籍をおき、学部・大学院の専門科目を担当する他、文学部共通科目と全学共通カリキュラムの文学関係の科目(「文学と人間」「文学と歴史」「文学と社会」)を担当している。専攻領域は、平安・鎌倉時代の和歌である。日本文学科には、平安文学・中世文学・近世文学・近代文学(2名)・和歌・俳諧・日本語学・中国思想・仏教を専門領域とする専任教員がおり、それぞれが住み分けて講義・演習を担当している。その構成・体系・カリキュラムの中で、私は専ら古典和歌を扱っている。

これに対し、全カリでは、日記・説話・物語など和歌以外のジャンルも取り上げている。たとえば今年度は、前期・後期それぞれ十作品を取り上げ、そのさわりを読んで、歴史・社会という視点から分析・考察する講義を行っている。他の分野もそうであろうが、日本文学の研究においても細分化が進んでいる。古典和歌の専門家である私にとって、専門科目で物語や説話を本格的に扱うこと(最新の研究状況を踏まえ、多くの学説の中から確信をもって取捨選択を行い、自説もまじえて学生

に提供すること)は、相当に困難なことである。しかし特定の作品の一部を読み解き解説することなら、ある程度まで可能である。全カリでは、できるだけ話題を広げたいということもあって、対象を和歌に限定しないのである。

私にとって、講義する上での専門と全カリの差異は相対的なものでしかない。過去に書かれた作品(の断片)について、現代を生きる学生に講義するという構図はどの科目においても基本的には変わらない。したがって、専門と全カリの区別に必ずしもとらわれず、私が講義で留意している事柄について述べ、必要に応じて専門と全カリの差異に言及していきたい。

—入学以前に獲得された知識を踏まえる—

学生の多くは、高校で古文を学んでいる。それに加えて受験勉強で古文を学習している場合も多い。大学で日本の古典文学を講ずる場合、それが高校の古文の授業や、受験勉強の延長線上に位置することを意識しておくことは重要である。

私は高校の教師をしたことはないが、学習塾や予備校で高校生や浪人生に古文を教えたことがある。自分が高校時代に古文の授業を受けた時の記憶や、学生の教育実習を参観する際での見聞、入試の採点結果なども参考になる。それらをもとに、学生たちが入学以前にどういう古文教育を受けてきたか、何を知っていて何を知らないか、を想定しながら講義するように心がけている。

高校で得た知識・受験勉強で蓄積した知識は、特に日本文学科の学生の場合、入学後の学習の土台となるから、それを忘れさせず、拡充する方向で、講義することはもちろん大切なことである。ただし、それらの知識を組み替えることも必要となる。たとえば、

[a]

- 蜻蛉日記の作者=藤原道綱の母
- 更級日記の作者=菅原孝標の女
- 枕草子の作者=清少納言

という文学史の知識は、学生の多くが知っているはずである。また、

[b]

- 「世の中」は「男女の仲・夫婦の仲」を意味することがある。

という語彙の知識も、学生の多くが暗記しているはずである。ここで問題なのは、「藤原道綱の母」という呼称や、「世の中」=「男女の仲」という用法について、恐らく学生たちが何の違和感も感じないまま暗記してしまっていると思われることである。

「藤原道綱の母」「菅原孝標の女(むす

め)」といった呼称は、平安時代の女性が、息子や父親との関連において社会に登録されているさまを示すものである。また「清少納言」は、本名ではなく、女房(侍女)としての呼称であるが、女房の呼称は近親の男性(父や兄)の官職にちなんで定められることが多く、ここにも当時の女性の存在のしかたが反映している。いっぽう「世の中」が「男女の仲・夫婦の仲」の意を表す用例は、主として平安時代の女性の著した作品に見られるもので、当時の女性の世界の狭さとその質を示すものである。したがって[a][b]の知識は互いに関連するものである。このことを指摘した上で、説話や歴史物語において、ある女性が登場すると、誰の娘か、誰の妻か、誰を生んだかという情報を記すのが常であること、系図類では女性の多くは名を記されず、単に「女」と記されることなどを合わせて紹介することによって、知識[a][b]の意味を明らかにすることができる。考えてみると、現代の日本においても、女性は結婚すると、固有名で呼ばれることが稀になり、「～さんの奥さん」「～君のお母さん」などと呼ばれるようになるわけで、「藤原道綱の母」のような呼称は、決して文学史の内側だけに存在するのではないことを理解させることもできる。

このようにして、学生が入学以前に獲得した知識を生きた知識に組み替えることは、それ自体意義のあることであり、また、その作業を通して、事柄を丸暗記するのではなく、まず違和感

を感じ、その意味を追求する姿勢が大切であることを示すことにもつながるであろう。

—作品を対象化する—

高校の古文の授業においては、作品は学ぶべき「古典」であり、それを批判的に読むことは、たぶん少ないであろう。しかも、さまざまな制約から、古文を現代語に移し替える訳読主体の授業が多く行われていることも予想される。その結果として、書かれた内容をそのまま受け入れ、共感することが古典の読み方だという錯覚が生ずることとなる。

しかしながら、昔書かれた作品を、われわれがすべてそのまま受け入れることなど、本来ありえないことである。たとえば、平安時代の作品には、「あやし」という語がしばしば用いられ、「変だ・そまつだ・卑しい」などの意味を表す。これは、作者も読者もともに貴族社会に属し、その立場から、一般人の小さな家を「あやし」と見、低い階層の人間を「あやし」と見る、差別的視線の端的な表れである。そういう描写を作者・語り手が行っている場合に、我々教師はそれをそのままなぞって語ることはできない。また仏教説話では、家族を捨て出家・修行をし、極楽往生を果たす人物の話が感動的に語られるが、その感動を我々がそのまま共有することはむずかしいし、その必要もないだろう。

ここで大切なのは、作品をそのまま

受け入れるのではなく、それを対象化し、観察・分析することである。たとえば『方丈記』という作品は、「行く河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。」という有名な文で始まる。そこでは、川の水が常に入れ替わり、水の泡が生じては消えるのと同様に、人も家屋もはかないものだ、という主旨の文章が展開している。この名文の誉れ高い文章をしみじみ味わうことも無意味ではないが、大学の講義としては、人を水の泡に喩えるのはどの程度説得的か、という素朴な疑いから始めるほうが望ましいと私は考える。そのことによって、比喩に満ちたこの作品のある種の通俗性が明らかになるし、冒頭のしみじみとした叙述から、読者を説得するのではなく読者とともに陶醉する姿勢を読み取ることも可能になるだろう。

作品を対象化することは、必ずしも否定的に読むことのみにはつながらない。たとえば『蜻蛉日記』は、夫の不実を嘆く叙述がその大半を占める作品であり、その狭く息苦しい作品世界をそのまま受け入れること(共感し、感動すること)は容易なことではない。しかし、この作品が、きれいな事ばかりが記されたそれ以前の物語作品に対して、貴族の女性の不幸な生活をありのままに記して見せるという意図のもとに書かれていることを理解すれば、この作品が単に暗い作品なのではなく、過激な闘争を展開している作品であることが見えてくるであろう。

ある作品(文章)の意味は、そこに書かれている内容に止まらず、むしろ、それを読むことによって何が生ずるのか、その作品は何に対して存在しているのかなどを考えることによって見出されるものであろう。訳読主体の受け身の読み方に慣れた学生には、そのことを繰り返し示す必要がある。この点に関しては、全カリ科目の履修者よりも、古典に親しみを感じている日本文学科の学生のほうが、素朴な読み方をしやすいので、注意を払う必要がある。

—古典との距離をはかる—

平安時代の和歌には、しばしば機知的な発想が見られる。たとえば、冬ながら空より花の散り来るは雲のあなたは春にやあるらむ

(古今集)

という歌は、雪の降る情景を見て、わざと錯覚し、「冬なのに空から花が散って来る」といふかった上で、その理由を「雲の向こう側はすでに春なのか」と推測して見せたものである。また、当時の和歌には「松虫」に「待つ」の意を響かせたりする言葉遊びも多く用いられている。これらの機知的な(ある意味でわざとらしい)発想や表現の面白さを、学生に理解(素朴な共感ではない)させるのは容易ではない。

古典和歌を研究対象として二十年になる私は、機知的発想がしみ込んでしまっていて、「首相は難色を示した」という報道を聞くと、反射的に「男色」と

いう言葉が浮かび(質の低い機知である)、飼い猫(名は「太郎」)が私の肩に飛び乗ると、ただちに「太郎は身軽なのになぜ重いのか」などというフレーズが頭をよぎる。のみならず、それらをいちいち口に出して、同僚や学生を困惑させている。こうした機知的発想・表現は、現代日本においては「オヤジギャグ」などと呼ばれ、その地位ははなはだ低いのである。

この傾向と表裏の関係にあるのは、「自然なもの・ありのままのもの」を尊び、「意図的なもの・作弄的なもの」を忌む傾向であると私は思う。国語の教師が「感想をありのままに書きなさい」などと指導したり、テレビのお笑い番組が、「自然な(作弄的でない)笑い」を志向したり、若者が直接話法を多用すること(「腹が立って」と言わずに、「何これチョーむかつくって思って」などと表現する)などは、この傾向を示すものである。この時代把握が間違っていないとすれば、今の学生に平安和歌の機知的発想を理解させるのは非常に難しいことになる。平安貴族たちにとっては、ありのままの素朴な表現などは何の価値もなく、ありきたりの事柄を、どう面白く作弄的に表現するかを競って和歌を詠んでいたのだから。したがって、学生に平安和歌を説明するにあたっては、それに先立って、我々がどういいう時代・環境の中に生き、言葉を発しているのかをまず説明し、把握させることが必要となるだろう。その把握を共有した上で、現代の文化とは全

く異なる文化の形として平安時代の和歌を示せば、ある程度まではその面白さを理解させることができると思うのである。

「自然なもの・ありのままのもの」を尊ぶというのは、自分の素朴な感覚を大切に、自分の育った文化とは異なる文化を条件反射的に拒否する姿勢に通じるだろう。最近の学生(個人差は当然あるだろうが)にそういう傾向が存在すると思う私は、古典との距離を測った上でないと、その面白さの説明に入ることができないのである。

以上、述べたことを、要約して示せば、

- ① 入学以前の古文教育のありかたを想定し、それを踏まえて講義を行う。
- ② 暗記された知識を生きた知識に組み替えるように心がける。そのこと

を通して、疑い、考える姿勢の大切さを示す。

- ③ 作品に同化するのではなく、対象化して分析する姿勢を身につけさせる。
- ④ 現代の文化と古典との距離を示した上で、作品がどのような文化の中で作られているかを理解させる。となる。

以上、古典の講義をする際に、私が留意している事柄について記してみた。できるだけ、他の分野の教員にも参考になりうる事柄を取り上げたつもりであるが、どうであろうか。

(かとう むつみ 本学文学部助教授)